光栄の森

平成23年6月　毎月1日発行　第36
発行者 光栄プロテック　木之下

6月を迎えるにあたって

代表取締役　三田雅憲

今日も朝から雨が降っております。昨日も雨が降ったので、私は自宅でのんびりとテレビを見ていました。いつもであれば、「アタック25」の予定でしたが、昨日は児玉清さんの追悼番組として、番組開始当時から最近までの児玉さんの変化ぶりや歴史を放映していました。ご存知の方も多いと思いますが、児玉さんは大変な読書家で、ご自分が感動した作品や優れた作品を紹介する番組をもたれておられました。私もその番組で読みたいなと思うものを購入した者の一人です。

児玉さんを意識して拝見し始めたのは、70歳を超えらた円熟期からですが、相手の気持ちを組んで接する優しさや良いものを紹介していきたいというお客様に対する気配りが、いつもところどころににじみ出ているように感じました。

追悼番組の中でも日頃は、放映されていないカメラアングルが多数紹介され、番組出演者のみならず応援でスタジオにこられた家族や番組スタッフに対してもいたるところに気配りを見せられた児玉さんの姿がありました。その映像から感じたものは、自分の仕事に関わるすべての人、物に対する深い愛情です。こういう掛け値のない仕事ぶりがいろいろな方々から贔屓にされるのだなと感じると同時に、自分自身がこのような心境で仕事をしているのだろうかと改めて反省でした。そして、児玉さんに携った人々が涙しながらまた本当に無念の気持ちでコメントされている姿を見ても亡くなったときにここまで言ってもらえる人間になれれば本望ではないかとも思いました。

「人間は死を意識することで、見えてくるものがある。」とよく言います。児玉さんが死を意識しながら番組を進行していたとは思いませんが、一期一会の気持ちで仕事を進められたことは間違いないと思います。死というものがあまり現実的でない昨今、私を含め本当に生かされていること、生命のあることに感謝をして何かをやるという事に少し疎くなっているように思います。私自身もより一層感謝の気持ちで仕事に取り組めるようがんばります。

また5月より、旗手班長には私と一緒にお客様のもとへ納品に行ったり、一部営業業務もやってもらっています。今後もこのスタンスは変わりません。つまり班長も次のステージに上がれるよう努力してもらっているのです。残った皆で、今まで班長任せになっていた仕事をこなし、また責任感を持ってがんばってもらいたいと願っています。

今期もより一層飛躍の年にしたいと考えておりますのでどうぞ宜しくお願い申し上げます。